

第1章 戦場

シベリアでの捕虜生活①

恐怖と飢え、寒さのシベリア抑留生活①

たけしまひでお
竹島秀雄さんのお話から

○抑留 他国の人や物などを自国の権力内に置くこと。

○徴集 強制的に人や物をあつめること。

○キスカ島 表紙裏地図

○制空権 航空機によって、空中を支配する力。

○制海権 海軍の艦船によって海上を支配する力。

過酷な環境や飢えと寒さなどで、辛く、死にたいと思うようなシベリア抑留生活をしました。私は昭和十六年（一九四一年）に徴集兵となりました。この年、十二月八日、太平洋戦争が始まったことにより、この戦争の主力戦闘要員となる運命を背負うことになりました。

翌年四月、友人やいとこなどは、現役兵で札幌の連隊、旭川師団などに入隊していききました。そのとき、私は体が小さかったので、すぐに召集されませんでした。友人たちが召集された時に「秀ちゃん、背が小さくていいなあ。」と言われました。いつも「チビ、チビ」と言われて嫌な思いばかりしていたのに、初めて「背が小さくてよかったなあ。」と思ったのを覚えています。

しかし、その年の五月二十五日に召集令状が来て、結局、友人たちより一か月遅れで入隊することになりました。入隊したのは「青森電信四連隊」という通信部隊でした。

今は便利な無線や電話で通信しますが、当時は「トンツー、トンツー」と長短の音符の組み合わせを使ったモールス符号で通信をしていました。いろは四十八文字と数字等、全部で六十八種類の信号があり、それをすべて暗記して暗号文書を通信するのです。重要な命令などを伝える軍通信ですから、初年兵の教育も非常に厳しいのです。誤字脱字があると、間違えた数だけ殴られる制裁があり、顔が変形するほど厳しく鍛えられました。

初年兵教育が終わるとすぐ、アリューシャン列島のキスカ島に新設された北海守備隊司令部に転属になりました。私が行った時には、既にアメリカに制空権も制海権も握られており、

○アッツ島 表紙裏地図
 ○玉砕 玉のように美しくだけ散ること。全力で戦い、潔く死ぬこと。当時は、それが名誉・忠節を守ることとされた。

アメリカ軍の激しい砲爆撃に毎日さらされていました。

翌昭和十八年五月には、となりのアッツ島に、アメリカ軍二万人が上陸し、二千六百人ほど居た守備隊は、十八日間で玉砕しました。そのため二か月後、キスカ島も撤退することになりました。四方を敵に囲まれ、撤退は不可能かと思われましたが、季節はずれの霧によるアメリカ海軍の同士討ち等により、奇跡的に北千島に撤退することができました。この時、みんな「無事撤退できたのは、アッツの霊が守ってくれたのでは。」と感謝しました。撤退後は北千島の通信部隊に入り、通信兵として第一線の部隊にありました。

その後、昭和二十年八月終戦となりました。しかし、ソ連だけは終戦前の八月八日、日ソ中立条約を破棄してこの停戦に応じず、満州を始め、樺太・千島全島を占領して、六十万人もの日本兵をシベリアに連行し、抑留のうえ強制労働をさせました。この抑留生活での飢えと寒さで、九万二千人余りの人々が亡くなりました。

私も、北千島で停戦になり、そのとき、ソ連軍から武装解除を受けました。武装解除が終わるとすぐに、ソ連兵は我々に銃を突きつけて、腕時計や万年筆をうばい取りまし



イメージ図

モールス符号による通信

○将校 軍隊において、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。

○ニコライエフスク 表

紙裏地図

○侵攻 他の国や他の領地に攻め込むこと。

た。

あまりにひどい仕打ちを受けたと思
い、そのことをソ連軍の上級将校へ申
し出しました。上級将校は我々の前に担
当警備兵を集め「この中にいるか。」と
聞くので、「この人です。」と指すと、事
実の確認もせず「ズドン」と指された警
備兵を射殺してしまったのです。あまり
の驚きと恐怖で、以後、日本兵は被害
を申し出ることが出来なくなりました。
ですから、それ以後も貴重品がうばい
取られることは続きました。

その後、ニコライエフスクに連行され、
我々は物資の陸揚げ作業を昼夜の別なく
させられました。陸揚げする物資とは、
ソ連軍が満州に侵攻し、そこにあつた日本製物資を占領物資と称して、輸送したものでした。
ある日、警備担当のソ連兵が「今日は砂糖を荷揚げするからこれに入れて持ってこい。」と言つ
て小さな袋をくれました。我々が「この後、身体検査があるからそんなことは出来ない。」と
いうと、「今日は身体検査をさせないから大丈夫だ」と言いますので、「それなら今日は大丈
夫だ」と安心して服や外どうのポケットにあまり目立たない程度につめました。



イメージ図

ソ連兵による身体検査

しかし、作業が終わると、いつものように作業監督が我々を並べて、身体検査をしようとしてます。このままでは砂糖を盗んだことがばれてしまいます。警備兵が「今日は時間が無いから、私が兵舎へ連れて帰ってから検査する」と言うと、監督は「何を言っているか、作業現場の監督は私の権限だ。」と口論になり、激しい口調になったと思うと「ズドン」と警備兵は監督を射殺してしまいました。しかし、警備兵は「ダワイ、カザルマ（早く、帰れ）」と事も無げに日本兵に帰隊を命じました。

次の日『あの警備兵は、監督を撃ち殺して、きっと処罰されているだろうなあ』と思っていたら、いつも通りに現れたのです。「昨日、監督を撃つたのに大丈夫なのか」と聞いたら、「俺の持っている銃を取ろうとして手を掛けたから撃つただけで、何でもないと行って平然としていました。」

日本の軍のきまりも、とてもきびしいものがありました。ソ連兵は、味方でもすぐ射殺してしまうなど非常に冷たく、むごい感じがします。

この非情さは日本軍に対しても同じで、作業や死者のあつかいなどでも、とてもつらいあつかいを受けました。

DATA

平成20年度手稲区平和事業
聴き取り

- ・平成20年11月11日
- ・前田中央小学校



.....
竹島秀雄(たけしま・ひでお)さん

- ・大正10年(1921年)生まれ
- ・札幌市西区在住